

大きな宝珠形のつまみがある陶片

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

地中深く埋もれていた遺物は何を語るのでしょうか。遺物はその形態・出土状態から使われていた時代の生活を現代に伝えてくれます。また、出土場所と驚くような意外な場所が遺物によって結び付けられたりします。ここに紹介する一片の陶片からも、意外な場所が語られます。

高さ7.6cm・幅11.8cmの陶片は、京都市の中心地（中京区三条通柳馬場東入中之町）での立会調査によって発見されました。この調査では同時に800点を越える多量の織部・志野・唐津・備前など、桃山時代から江戸時代にかけての陶片が出土しています。これらの中には多くの茶陶が含まれています。使用した痕跡が無いことと多量に出土したことから商品と考えられ、この地には茶陶を商う店があったと考えられます。織部や志野とともに出土したこの陶片も商品としてこの店にあったのかも知れません。では、これはどこで焼かれ



調査地点

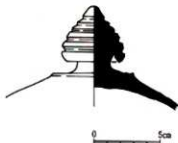


発見された陶片

て京都へ運ばれて来たのでしょうか。この陶片を観察しながら調べてみましょう。

今回出土した織部や志野などが作られた時代は17世紀前半の慶長から元和年間にかけてと思われる、この陶片も同時代のものと考えられます。無軸で素地がよく焼きしまり、外面は茶褐色、内面は赤褐色に発色し、胎土は細かく、ねっとりとした感じがします。これらの観察から日本の焼き締め陶器とは少し違うようです。

陶片の形状はつまみの付く蓋で、つまみの頭の部分から外へ向けて平坦になりますが、つまみを囲むように二本の筋が巡り、その間が狭くなっています。口縁の部分に向けて段が付きゆるやかに下がり



実測図

ます。口縁は欠損してよくわかりませんが、つまみは全体のバランスからすると大きく、先端から五つの段がつく宝珠形で、意匠が異国風な特徴を持っています。

この蓋は、内面に残った痕跡からロクロを使って作られていることがわかります。外面にある二本の筋は、先がU字形の刃の鋭い工具で削られており、さらに撫でて調整されています。宝珠形の手まみも同じ方法で作られ、蓋に貼り

付けられてから焼かれています。

では、これに似たやきものはあるのでしょうか。それは写真1・2に求めることができます。写真1は茶の湯の世界では「しんぎ切の水指」と呼ばれているもので、その蓋の形状が陶片の形状とよく似ています。宝珠形をつまみが付き、平垣部があり、外面に鋭い刃の工具削り痕を残す点でも一致しています。ただ、宝珠形をつまみは段にはなっておらず、上部に細かい線が巡っている点が違います。

宝珠形をつまみが似ているのが写真2の香合です。この蓋のつまみには段があり、つまみも大きく、近似しています。身にも陶片の蓋と同様に刃の鋭い工具による三本の筋が巡っています。紹介したこの二例の焼きしめ陶器は茶の湯の世界では「なんざん南蛮・島物」と呼称され、南海の陶磁の総称として使用されています。



写真2 南蛮宝珠紐香合
(全高7.4cm 胴径5.9cm)

最近、堺や博多、大阪など各地でベトナムやタイの陶磁が出土しています。代表的なものに長胴の壺があり、茶道具でもこれに近似したものがみられ、なかに「なんざん南蛮水銀壺花入」という名称をもつものがあります。これらの長胴壺はベトナムの窯址周辺やベトナム中部城の採集品に同様のものが見られます。紹介した陶片も作りや胎土がベトナムで採集された陶片と



日本人町所在地 (17世紀)

よく似ており、宝珠形の意匠からして東南アジアのものとしてよく、おそらくベトナム産と考えられます。つまり、この陶片は遠く海を渡りこの日本の京都の地にやってきたのです。

17世紀前半といえば、日本では豪商が海外で活躍し、朱印船貿易がまだ盛んな時代です。世界的にはイギリスやオランダの東インド会社が活躍した大航海時代でもあります。ベトナムやタイには日本人町が形成されており、東南アジアからもたらされた陶器は商品として京都の町で売られ、茶道具として使用されていたこともあったのです。

遺物は過去を語らせることによって時間を越えて現代と過去を結ぶ役目をします。また遺物は空間を越えて場所と場所を結ぶ役目もします。陶片を見つけることも重要ですが、それに加えてこのような歴史の認識に達することに、私たちは興味をおぼえています。たった一片の陶片によって歴史がわかることもあるのです。

(永田信一・吉本健吾・小楢山一良)



写真1 南蛮切水指 (全高15.7cm 胴径16.9cm)
写真1, 2とも『南蛮・島物』根津美術館1993より転載